

主婦の友社が発行する雑誌“Premo”が最近「マタニティーストラップを付けよう」というキャンペーンを始めました。皆さんも地下鉄の中吊り広告でご覧になったことがあると思います。

妊娠していることをさりげなく周囲に知らせることによって「乗り物の中で席を譲ってもらえたら」「近くでタバコを控えてもらえたら」「階段でうえの子の手を取って降りてもらえたら」などの妊婦さんの願いと「妊婦さんだと分かっていたなら席を譲ってあげたのに」「タバコの煙は胎児に悪いから遠慮したのに」「たいへんだらうから手助けしたのに」などの他人の良心を結び付けたいとの発想だそうです。

お腹が目立つようになれば自然に「この人は妊婦さんだ」と分かり周囲が気遣いますが実は最も手助けや配慮が必要なのはお腹が目立たない妊娠初期なのです。精神的に不安定になったり、つわりがひどかったり、貧血がみられたりと外見では分かりませんが妊婦さんの身体の中では大きな変化が起こっており、場合によっては切迫流産の危険性も高いのです。この点からも私はこの企画は素晴らしいものだと思っています。

ところがとても残念なことを耳にしました。「マタニティーストラップ」を付けて電車に乗っていた妊婦さんが、同乗した女子高校生に「勝手に孕んだくせに何アピって（＝アピールして）るんだよ」と詰られたそうです。何てことでしょう。この高校生はどうしてこんなふうになってしまったのでしょうか。私は強い憤りとこの高校生の将来性に大きな不安を感じました。

現在、学校等で盛んに性教育が行なわれていますが内容は「避妊」に偏っているように思います。確かに「避妊」に関する知識は必要ですがそれよりもっと重要で先ずしなくてはならないのが「生命の偉大さ、尊さ」を根本とする道徳面の教育ではないでしょうか。

一人の女性が一生に授かる命の数は他の動物と違ってごく少数です。それだけヒトがこの世に生まれ出てくるということは偉大なことで、赤ちゃんは正に「授かりもの」なのです。この意識が少しでもあれば先の女子高校生の対応も大きく変わっていたでしょうし現在行なわれている「性教育」も生きてくると思います。そして皆が妊婦さんを労わり尊敬し共に喜び合える心で接するような温かい社会になることを切に願っています。